東アジアの核をめぐる情況の中で
私たちはどこに立ち　何を目指していかなければならないか

（日蓮宗現代宗教研究所嘱託）　梅森寛誠

東アジアに於ける日本という位置―安保体制と朝鮮半島の今

安保体制ということからさらに申し上げると、概ね同意見ですけど、安保体制というものが、東アジアの地理的な中でどういう意味をもっているかということ、ですね。私たちは目線を日本とかアメリカとかだけではなく、東アジア全体にシフトした形で押さえるべきではないかな、という思いがあります。ただ、とはいうものの、戦後の東京裁判を受け入れて独立国となる過程に於いて、それを全面否定するつもりはありません。あるいはまた、今日的な中でいきなり安保廃棄を急速に言うつもりはありません。調和の問題だと思っているんですね。その上で申し上げると、安保体制というのは、まさに軍事同盟にほかならない。アメリカの核の傘、軍事力の傘にあり、その中で日本が軍備を自衛隊の名で着々と増強していることが、米・日の軍事的情況が、アジア諸国にとっていかに脅威となっているかを、まず思うべきなのではないか。その辺の視点が弱いような気がしてならないんです。

よく、日本はアメリカの五十何番目かの州だとか言われています。ますますそういう情況が色濃くなっているように思われてなりません。そのことが、今回の朝鮮の核実験という具体的な情況の中で対応が迫られているような気がします。日本はアメリカの一番西のはずれではないか。あるいはまた、アメリカを守る壁と言いますか、日本がアメ

リカから守られるのではなく、アメリカの体制を守るために日本がある。そのために米軍再編成とか沖縄の問題やらが『九・一一』以降、さらに強められていくというようなことを、大変憂慮しています。

核実験のことでは、朝鮮（私は「北朝鮮」という言葉は使いたくないんで「朝鮮」と言います）が、ミサイル発射や異例の予告を経て、十月九日に核実験を強行した、これらの背景にあるものはどういうことなのか、となると、やはり安保体制というものの脅威を指摘する必要があろうかと思うんですね。そして、日本では「朝鮮はけしからん」といろいろと報道されております。世論もかなりそれに輪をかけたような動きがあります。が、朝鮮に於けるプルトニウムの量がどのくらいあるか、また日本に於いてはどうなのかという、非常に基本的な問題なんですがね。情報は限られておりはっきりしたことはわかりませんが、朝鮮のプルトニウム保有量は、幅がありますが二〇キロから五〇キログラムです。それに対して日本に於いては四三トンとか四四トンです。五倍や十倍じゃないんです。千倍です。千倍の量をもった国が、千分の一のものがけしからん、という道理はどこにあるのか、という点は、まず端的に指摘したいと思います。その中で、六ヶ所村の動向等と関わってくるんですけど。つまり、日本は圧力がかけられたのではなく、かけている側に立地している、歴史的にもですね。

それに関連しまして、なぜ朝鮮がこのような形に出ているのかというと、やはりそれは日本としての過去ということを見れば、示唆的なことが浮かび上がってくるわけです。一つは、エネルギー的な攻勢をかけられるということ。要するに、日本がＡＢＣＤ包囲網という形でエネルギー的に包囲され、活路を見出すべく南の方に打って出る、というかつての経緯がありますね。そういう「窮鼠猫をかむ」というような情況になる可能性として、その意味での朝鮮の動向は慎重に見ていく必要があろうかと思います。あるいはまた、朝鮮の体制ということを考えますと、私実は十五年前に朝鮮(共和国)に行ったことがあるんですが、『ピースボート』で。ただ通り過ぎただけですけど。やはり異様だったのは、金日成・金正日の写真が至る所に飾ってある、ということ。どこかで見たことあるな、（「御真影」を

拝む形で)日本でもかつてそういうことしたんだな、ということにすぐ思い当たりました。つまり、その政治体制でも、植民地支配のそれを利用するような形で、日本から学んだような部分も大いにある。ですから(今日本は朝鮮敵視政策をとっていますが)朝鮮の動向を一番理解できる材料は、日本がもっているんじゃないかな、と(「国体護持」への執着という共通点も含め)思ってしまいます。

その上で、この日本が戦争態勢に推進しつつある情況の中で、私たちは我々宗門人も含めて、かつて戦争にいかに加担していったか、ということと、今の核を取り巻く朝鮮・東アジアの問題というものと、つながり合っていく、そのようなことを強く感じています。

核開発とヒバク問題—虐げられる人々の存在

隣国関係、朝鮮との関係の中で、ちょっと押さえておきたいこととしては、まさに今朝鮮半島では休戦中、戦争状態だということなんですね。三十八度線を挟んで。いつなんどきまた熱戦にもどってもおかしくない情況にあるということなんです。さきほど私、北に行ったという話しましたけど、板門店を北の方、「板門閣」の方から見るという体験をしたんですけどね。そうすると、向こう側に国連軍と称するアメリカ軍がいて(対峙して)、そのさらに後ろに韓国があり日本があって、日本から米軍基地を提供して、ということの恐怖を感じ取ることができました。そのことを強調し、その当時世界に宣伝合戦している。いや何とも浅ましい、不毛なことをしているんだな、という思いをしました。つまり、休戦協定を結ばれてから五十年経過しても、決してこれで戦争終わってはいないという情況の中で、今の朝鮮がかなりな軍事費用を使わざるを得ない現実がある。それはとんでもない困ったことなんですけど。ですから問題は、戦争状態ではなくしていく、やはり平和な状態に努力していく、ということ。そういう努力ぬきの、

今は現実的にこうだからバランスをとるために軍備が必要だとか、そのことが平和につながるんだという議論には、とてもついていけないな、という思いをしています。

それと、石川修道さんの発言の中に核に関してのものがありました。戦争中からドイツも含め核の開発が始まっており、具体的にはヒロシマ・ナガサキの原爆投下から、人類に於ける大きなパンドラの箱を開けた時代に突入しているんですが。そもそも最初、軍事技術から出発して応用されて発展したことは、その通りだと思います。問題は、それをどういうふうに、その後の歴史の中で総括していくのか、ということを考えると、これはやはり、あってはいけないものだった、という基本線は押さえたいな、と思っております。

やはり核に関しては本質的に、まさに軍事的に使ってはじめて利用価値のある、威力を発揮するものなんです。困ったことに。だから、もともと軍事的な意味で（抑止力として）核をもちたい、となる。しかし核大国からすれば、ドミノ式に核拡散していくことは防ぎたい、あるいは核を独占したい、という欲求のもとで、ＮＰＴ体制が築かれるんですね。今でも、不平等な条約と言われている。ＮＰＴが核クラブの独占を認める、その見返りに非核国の「核の平和利用」を認めた。第四条でしたかね。それがあるが故に、「平和利用」と称して実は軍事転用の欲求を抑えきれない。それは、今のＮＰＴ体制下の中で、イランだけでなく世界各国に核が拡散していく情況でわかります。これを踏まえますと、やはりそれはあってはいけないものだったんだ、ということは、基本的なこととして認識しておきたい。

それともう一つ忘れていけないことは、私自身はこの「平和利用」というものは最初からなかった、という論者なんですが、いずれにしても、核の利用の過程で、ヒバクなしにはおかない、という残酷さですね。我々の身体・命に対して取り返しのつかないダメージを与える。それはウランの採掘から始まり、濃縮、加工、移動、そして後始末に至るすべての段階で、軍事利用であろうと平和利用であろうと、核というものの宿命的なものとして、これは避けら

れない。では、その避けられないヒバク、健康障害や遺伝障害という重い問題に対して、それを誰が担うのか、ということは、特に我々宗教者は忘れてはいけないことではないか、と感じています。例えば、ウラン鉱山は先住民の居住地にどういうわけかあります。オーストラリアにしてもカナダにしてもアメリカにしても。そうした所で採掘されるんですが、本来は先住民の万年単位での生活感覚の中で、これは「出すな」という言い伝えがあった。別に科学的知見がなくても、それで、それを掘り出すことはなかった。しかし、アメリカや列強諸国の力、富によって掘り出され、健康障害を受けてきた。近現代史が語っている通りであります。誰が担うのか、というと、やはり弱い立場の人がヒバク作業に従事します。原発産業でもその通りで、弱い立場の人が、あるいはホームレスと呼ばれている人たちが集められて、情報も与えられない、安全対策も充分に教育されない中に、原子炉に人海戦術的に放り込まれている、という現実があります。

あるいはまた、最近は徴兵制に関してどうだこうだとあります。アメリカでは今徴兵制はないんですね。日本でも、これから徴兵制が復活するかという、少し前まではそんなことはあり得ないと思っていたら今は案外あり得る話ではないかな、という議論もあります。が、これはもしかしたら、徴兵制なしにやるつもりかな、という気がします。何を根拠付けて言うかというと、格差拡大の問題なんですね。どんどん「勝ち組」「負け組」というものが拡がっていく、そしてまた情報にしろ教育にしろ、これ以上格差の拡がりが進んでいけばどうなるか。やはり、今アメリカの徴兵を担っている人たちがどういう人たちなのか、を見れば想像できます。非常に弱い立場の、人種差別を受ける、黒人であったり、マイノリティー、アジア人やヒスパニックの人等が、いずれにしても弱い立場の人が、とにかく軍隊に入って「勝ち組」になろうとする。そうした中で、今後徴兵制なしで進められるのではないか、と。

私が言いたいのは、そういう今の現実がどうでだからどうだ、というのも結構なんですが、その中で虐げられる人がますます増えていく、そのことに目をつぶってはいけないということですね。それを最優先した議論をしていくべ

きだろうと思います。また、これから核武装の問題とか、改憲の議論ということになってくるでしょうが、これらは一般論ではなく行うべきです。例えば今、中川氏や麻生氏が（核武装を）タブー視してはいけない、議論するのが何故悪い、という形で言いますが、実際には彼らの戦略の中で言っているんですね。こうしたやり方に対しては、かなり警戒心をもつべきなんだろうな、と思います。あるいは憲法に関しても、私は憲法九十九条というものを非常に重要なものだと思っているんですが。大臣や国会議員、また公務員たる人たちは憲法遵守義務があるということです。が、そのことを、ほとんど語っていないような感じですね。こういうこともちょっと気になっているところなんですね。ちょっと、あっちこっち雑駁なんですが、感想めいたことを述べさせていただきました。

非暴力への希望—世界財産としての憲法九条

非暴力ということがだいぶ出てきました。私も、ここ一～二年、非暴力のことを、特に不軽菩薩との関連で言ってきています。それに対していろいろな意見はあるようなんですが。私は、非暴力ということが、我々のスタンスに近い所にあるのではないか、と法華経の中で感じ取っているんです。さらに、非暴力が、理念的な「戯れ事」ではないということもですね。（非暴力の現場は）さほど大きなニュースにならないから、あまり一般化できないものがありますけれども、確実にこれは現れてきています。これは認識すべきだと思います。

具体的に言いますと、一九六八年にチェコ市民はどういうことをしたのか。丸腰ですね。ソ連の軍隊に対して阻止しました。あるいは、もう少し時代が下って、フィリピンの革命、コラソン・アキノの時の一九八六年、あの時も丸腰の市民がマルコス政権を倒しました。いずれも、武器をとって流血で、ではない。そういう事例がある、ということですね。去年、私は教化学研究発表大会で事例に示しましたが、韓国の核廃棄物反対運動でも、カトリックの神父

さんが、まさに礼拝行（三歩一拝運動）で、仏教的な手法というべきものを用いて、それぞれ異なる宗教者同士が力を合わせて勝ち得ている。

いろいろな所で、それぞれの民衆レベルの闘いの中で、丸腰非暴力で進められている。むしろそういうあり方が防衛力になってきているような、なかなか信じ難く思われるかも知れませんが、そういう変化が見えてきているということにも、もうちょっと目を向ける必要があるのではないかと感じますね。今いろいろと非武装都市（無防備都市）といったものを条例でつくる動きもありますね。武装をしないことが一番安全につながる、ということを学びつつある。そして、憲法九条が日本だけのものではなくて、世界的な財産として波及している実績として、私は感じ取ります。

で、その反対のケースもやっぱりありまして。日本で言えば、何故ヒロシマ・ナガサキに原爆が落ちたのか、何故狙われたのかということですね。広島という所は軍事都市だったんですね。日清戦争の時に大本営が広島に移されました。そこで一八九四年八月一日に、広島の宇品港から出兵します。そういう経緯があります。その後、広島という場所が軍需産業の中心となった、ということですね。長崎も、三菱を擁していました。そうした武装は、単純化して言えば、敵からすれば、そこを叩けば効果的だということですね。それだけでの理由ではないでしょうけれども。基地があったり軍需産業があったりする所が狙われる。沖縄もそういったことが言えるのかも知れませんし。また、あるいは日本が空爆した場所も、そういったことも言えるのかも知れません。

軍備をもって重武装すればするほど危険を招く。逆に、非武装に徹し国際世論に訴え、みんなで阻止していけば、結果的に安全が保障できる。そういった方向が、市民の民衆レベルの中で、少しずつ現れてきている。その中に我々は、法華経者としての理念で、もちろん憲法九条もそうですが、それらがマッチした形で訴える余地は大いにあるのではないか、と思っています。